

18世紀ドイツの文学的状况 (4)

— 総論・レッシング、ヘルダーからゲーテへ —

藤 本 正 孝

Der literarische Zustand des 18. Jahrhunderts in Deutschland

— von Lessing, Herder bis Goethe —

Masayuki FUJIMOTO

Das 18. Jahrhundert in Deutschland war das Zeitalter einer Wendung. Lessing war der wirkungsreichste Bildner. Er studierte die Regeln des Dramas und baute sein Drama aus lauter für die Zusammenhang der Handlung notwendigen Momenten auf. Die Dramen Lessings fehlten die Verwegenheit der Laune. Da waren nicht unverständige Charakter, keine in der Souveränität der Leidenschaft mit dem Leben spielenden Personen und nichts von der sorglosen Benutzung des Zufalls, Herder übernahm von Hermann die Kritik gegen die kalte Vernunft der Aufklärung, die Lehre von der schöpferischen Freiheit der Individualität und von dem innigen Zusammenhange von Volksseele, Sprache und Poesie. Für Goethe war Herder der entscheidende Lehrer. Damit begann eine neue Epoche der deutschen Lyrik. Leidenschaft und Glut der Seele fanden ihre eigene Ausdrucksform. Und sie konnte sich nicht mehr an die überlieferten Regeln binden. Goethe, der in der Jugend das ewige Leben im Augenblick erfuhr und mit dem Augenblick wieder verlor. In Weimar aber fand er den ewigen Sinn nicht mehr von Augenblick zu Augenblick. Was sich sonst lyrischen Stimmungen kundgegeben hatte, stand als ein vom Augenblick abgelöstes Wissen zur Verfügung. Goethes Lyrik wurde stiller und vergeistiger. An die Stelle der stürmenden Leidenschaft traf eine überschauende tiefe Besinnung. Das kennzeichnet den Übergang vom Sturm und Drang zur geformten Reife des klassischen Stils.

18世紀は啓蒙主義に始まり、シュトルム・ウント・ドラングを経て古典主義へと発展した世紀であり、近代ドイツ文学の誕生の時期でもあった。近代市民階級の台頭とともに生じた批判的、理性的精神は、もはや生の意義を、天国には求めず、何ものにも左右されることのない近代市民的自覚を人々にもたらしたのである。このような状況のもとで、18世紀のドイツ文学は、一つの新しい構成を示すことになる。レッシングから、ヘルダーを経てゲーテへと受けつがれ

た理論の展開はいかなるものであったのか。

1

ゲーテが「詩と真実」¹⁾において、「今日では、もはや想像もつかないほどのがらくたを生み出していた」¹⁾と述べた時代に、レッシングは全人類の教育を論じ、旧体制に対する戦いを始めたのである。彼は理性が精神を、そして情熱や想像力をも統御し、理性的、道徳的感情によって内面から規定されている人間こそが文学の理想であると主張した。未熟な社会状況の中で、文学の改革をめざすレッシングの戦いは孤独なものであった。彼は、まず、当時何物でもなかった文学に因果関係の確固とした連関を求めたのである。作家の仕事は、この因果関係の連関の中でのみなされねばならないと確信していた。空間、時間を含む、あらゆる事柄の必然的連関は、高所から想像の世界に向かって働きかけられる作者の情熱よりも優先するのである。この理論は、レッシングにおいて明確化され、ドイツに新しい文学を用意することとなった。ゴットシェドに代表される当時の文学は、作家にとって不可欠な能力として「機智」が重要視されていたのである。

レッシングは、彼の「演劇論」²⁾において、音楽を例に述べる。——一つのシンホニーを支配する情熱は一つだけでなくてはならない。——第一楽章の激しさが溶けて、第二楽章の歎きになり、第三楽章において高まって、一種の荘厳さになる。楽章ごとに情緒を中断させ、次の楽章で全く新しい別の情緒を持ちあげ、これをも捨てて、同様に全く違った三番目のものへ突進していくというような、勝手な振舞をする音楽家は、無益に多くの技術を浪費したにすぎない。彼は不意打ちをくわせ、麻痺させ、くすぐることはできる。しかし、感動させることはできない。我々の心に語りかけて共感の感動をよびさまそうとするならば、——連関を考えねばならない。連関がなく、また、すべての部分の非常に緊密な結合がなければ、最上の音楽も、むなしい砂山であり、印象を保ちつづける力もない。連関があってはじめて、それは芸術家の不滅を讃える堅固な大理石となるのである。——

レッシングがくり返し言及しているこの因果性と連関の概念は、ライプニッツの哲学を基盤とての彼の独創的な天才概念とも一致するものである。

「天才は単純を好み、機智は錯綜を好む」³⁾のである。

1) Goethe: Dichtung und Wahrheit Sechstes Buch

2) Hamburgisch Dramaturgie 27. Stück Den 31. Julius 1767

3) Hamburgische Dramaturgie 30. Stück Den 11. August 1767

レッシングにとって、天才の注意をひくことのできるものは、相互の関係から生じる事件、つまり、原因と結果の連鎖だけなのである。結果を原因へともどし、原因に対して結果を考察すること、つねに偶然を排除し、生じる事柄すべてを、これ以外には起こりえなかったかのようにしさせること。これこそが、役にもたたなかった記憶の貯えを、精神の糧に変化させるために、歴史の領域で仕事をしようとするときの天才の課題であるとする。これに反して、因果関係を無視して同異関係のみを重要視する機智が、もしも、本来天才だけに任されている仕事をあえてしたならば、同時発生という点以外は、何も共通点のない事件に心を奪われるだけである。というのがレッシングの考えであった。

ギリシャ美術をドイツに紹介したヴィンケルマンが、ラオコーン像を評し、——水の面がどれほど荒れ狂おうとも、深海においては常に静かであるように、ギリシャ人の手になる形象は、どれほど激しい情熱が表現されている場合にも、常にその偉大にして厳粛なる魂を物語っている。この像は、ヴェルギリウスが書いたように凄まじい叫び声を挙げてはいない。肉体の苦痛と魂の偉大さが、この彫刻においては、同程度の強さで配分され、そして釣合いを保っている。これほどに偉大な魂を表現するには、単に美しい自然を模倣するだけでは充分とは言えず、彫刻家自身が胸底に熱烈な精神を宿していなければならない。そして、ギリシャの彫刻家はその精神の烈しさを大理石に刻みこんだのである。⁴⁾——と紹介した。これに対して、レッシングはこの説を尊重しつつも、あえて異論を述べている。レッシングの考えによると、造形美術の領域は、空間中に配列された具体的な眼に見えるものであり、それを形姿と色彩という手段で描写することである。それに対して、文芸の領域は、時間の連続、言葉の継起によるとする。言葉はその人為的記号によって、空間の中に並存するものも、時間の中に継起するものも、等しく表現することができる。しかし、詩人は単に理解されることを欲しない。詩人にとっては、自分が表現するものに完全な直感と強い印象を与えることが重要なのである。そのためには、述べられる言葉は、述べられる対象に対して適正な関係を持たねばならない。なぜなら、単なる言葉の継起には、対象の部分部分を次々と直感にもたらすことのできる十分な能力はなく、印象も持続せず、効果をおよぼすことができないからである。それ故、人々に強い直感と印象をもたらすために、できる限り有効な瞬間が必要であり、その瞬間が前後して現れてくるような、対象の展開、因果性、確固たる連関が必要となるのである。この規則的な連関は、情熱のただ中にある戯曲や小説の主人公さえも規定することになった。現実に対する人間の明瞭な関係を放棄し、夢のように人間を支配した情熱は、もはや、戯曲や小説の中心にはならなくなったのである。

4) Laokoon oder über die Grenzen der Malerei und Poesie

さらに、レッシングは至高の独創を小さな独創力でもって模倣するためには、現実の世界の各部を置きかえ、取りかえ、減らし、増して、自らの本来の意図に結びつく独特な一個の全体をつくりあげるのが天才の世界であるとする。

Absicht.—Mit Absicht handeln ist das, was den Menschen über geringere Geschöpfe erhebt; mit Absicht dichten, mit Absicht nachahmen, ist das, was das Genie von den kleinen Künstlern unterscheidet,allein mit der Anlage und Ausbildung seiner Hauptcharaktere verbindet es weitere und größere Absichten; die Absicht, uns zu unterrichten, was wir zu tun oder zu lassen haben; die Absicht, uns mit den eigentlichen Merkmalen des Guten und Bösen, des Anständigen und Lächerlichen bekannt zu machen; die Absicht uns jenes in allen seinen Verbindungen und Folgen als schön und als glücklich selbst im Unglücke, dieses hingegen als häßlich und unglücklich selbst im Glücke zu zeigen;⁵⁾

— 意図である、意図をもって行動することは、人間をつまらぬ他の被造物より上位に区別するものである。意図をもって創作すること、意図をもって模倣することは、天才を単なる芸術家と区別するものである。— その意図は主要人物の素質と発展に、より広大な意図を結びつけることになる。すなわち、我々がしなくてはならないこと、してはいけないことを教えようとする意図、我々に善と悪との、正常と滑稽との、本質的な特徴を教える意図。前者があらゆる関係と結果において美しく、不幸においても幸福であり、後者が、たとえ幸福に見えても醜く不幸であることを示そうという意図である。 —

彼は当時の貴族階級が外国文化の吸収に急な余り、洗練され、機智に富んだ文学のみを重要視したことに對して、これを批判、独特の天才概念でもってドイツ国民文学の完成を願ったのである。彼は自らの作品にその願い込めた。登場人物の行為に信ずるべき真実と、必然的因果関係を求めた。事物に対する規則正しい関係、本来の意図通りに筋は進行する。情熱に駆られての突然の迂回は認められない。人物の正確な描写、行為の緊密な結合、それに基づく時間的因果関係の写実的处理、これらは情熱から生じる美的価値よりも重要視された。レッシングのめざしたものは、個々の感動ではなかった。全体を包括する抑制された感動、人類の普遍的な価値の追求であった。道徳的感情に導かれ、生の現実に対する合理的連関に立つ人間である。ルターの信仰以来、ドイツ的な考え方のもっとも個有な根本的特徴は、道徳的意識の内面性、

5) Hamburgische Dramaturgie 34. Stück Den 25. August 1767

いわば宗教の自己の内面への復帰である。⁶⁾ 生の最高の価値は外的な働きではなく、あくまで内的な働きにあるという確信であった。ここには国家の分裂、市民階級の政治に対する無力さから生じたところの、ドイツの特殊な社会的、政治的背景があった。前号「自己の内面への復帰」において言及したように、レッシングの描いた登場人物、エミリア、オドアルド、ミンナ、ナータン、いずれにもこの新しい人間像の理想が性格として与えられている。特に「エミリア」における死の決意の場では明瞭な形となって現われている。

Ich kenne das Haus der Grimaldi. Es ist das Haus der Freude. Eine Stunde da, unter den Augen meiner Mutter,—und es erhob sich so mancher Tumult in meiner Seele, den die strengsten Übungen der Religion kaum in Wochen besänftigen konnten!—Der Religion! Und welcher Religion?—Nichts Schlimmers zu vermeiden, sprangen Tausende in die Fluten, und sind Heilige!—Geben Sie mir, mein Vater, geben Sie mir diesen Dolch⁷⁾.

— 私には何も保証できません。何も請け合えませんが。私はグリマルディの家を知っています。あれは歓楽の家です。あそこに、私はお母さまに見守られ一時間いました。そして、それだけで私の心は沸きたちました。宗教の教えを何週間もいとも厳しく実行してみても、やはりだめでした。宗教のです。どの宗教だというのですか？ かつて悪しき事を避けるために、無数の女が川に身を投じました。そして聖女となったのです。どうか私のその短刀をお渡し下さい。

公爵の罠から逃れることが出来ず、自らの心がその誘惑に負けるかもしれないという恐れから、彼女は死の決意をする。18世紀ドイツにおいて、君主に見染められ、選ばれた一人の娘が、運命の力を認めず、自己の内面的自由を死の決意でもって主張するのである。レッシングの理想の人間像である。娘エミリアを刺した父オドアルドも、返す刀で自らの命を断とうとはしない。自らの意志で神の前に立つ。レッシングは、もはや一般的な悲劇の結末を望んでいない。レッシングの戯曲には思い切った気まぐれが欠けている。無分別な人物は出てこないし、情熱や想像力を至上のものとし生をもてあそぶ人物も登場しない。偶然を無雑作に利用することも決してしない。彼は、あくまで全体的、包括的感動を求め、ドイツの文学に新しい人間像の誕生を願ったのである。しかし、彼は真に理解されることは少なかった。ゲーテは、— レッシングは最高の知性をもっていたから、彼と同レベルの知性をもつ者にしか、彼から本当に学び

6) Das Erlebnis und Dichtung s 42

7) Lessing Werke Bd. 1 s 464

とすることはできなかった。中途半端な能力の人間にとっては、彼は危険な存在であった。⁸⁾ — と述べている。成熟しつつある市民階級は、より自由で、活発な文学を求め始めたのである。

2

ヘルダーは、1774年、東プロイセンに生れた。ケーニヒスブルクの大学で神学を学んだ後、文芸批評家として活動を始めた。封建制と封建思想に対し改新をはかるという点で、レッシングと同じ立場に立っていた。しかし、レッシングの影響のもとに書かれたといわれる初期の論文において、すでにその発展の跡がうかがえる。彼の根本的態度は知性ではなく、生き生きとした感覚によって作品に迫ろうとするものであった。

ヘルダーが最初に主張したことは、文学に歴史性の概念を導入することであった。各時代、各民族には固有の文学があり、そこにこそ、真の価値があるとみなしたのである。彼にとって、言語は単に相互理解の手段でも、表現の手段でもなく、思想と同一のものとして存在した。論文「真の詩人は母国語で歌わなければならない」⁹⁾において、— 母国語こそ私たちの心に入ってきた最初のもの、しかも、それは、言葉によって心の中に概念と形象の世界を築きあげる幼年時代に入ってきたものである。この世界は、やがて詩人にとって宝の蔵になる。この中で詩人はやすやすと想像世界に遊び、表現を見出し、彼にとってかけがえなく大切な多彩で豊かな富を見いださねばならない。そして、この宝の蔵の中でこそ、詩人は神々の使者たる雷といわず、すなわち詩的靈感に打たれ、人の世にそれを伝えねばならない。私たちの魂と耳目と言語機能はこの宝庫とともに形成されている。— 死語を用いてピンダロスやホラチウスのような詩人になれたり、母国語以外の言葉を用いてシェークスピアのようになれる者がそもそもありうるであろうか。— と、述べた。18世紀のドイツにおいては、学術用語はラテン語、教養人の使う言葉は多くはフランス語であった。1780年に発表されたフリードリッヒ大王の「ドイツ文学論」がフランス語で書かれ、レッシングが「文学書簡」や「演劇論」で論陣をはった当面の敵は、フランス文学であり、フランス語であったという社会的状況の中で、ヘルダーの出現は以後のドイツの文学にとって重要な意味をもつことになった。

彼は、大学の師ハーマンより啓蒙主義が必然的に内包する冷徹な理性に対する批判、個人の創造的自由、民族精神と言語、詩との密接な関係、これらについての教えをうけていた。ハー

8) Eckermann Gespräche mit Goethe Dienstag den 25. Januar 1825

9) ドイツ文学歴史と鑑賞 朝日出版

マンによると、詩は人類の母語であり、それは園芸が耕地より古く、画が文字よりも古く、歌が朗読よりも古いのも同じであるとする。感覚と情熱は、象徴以外の何物をも語らず、象徴以外の何物をも理解しない。人間の認識と幸福の本質はことごとく象徴のうちにあるという。つまり、情熱と感覚で世界を見て、それを象徴の形で人類に告げ知らせるのが詩人の使命なのだ。それ故、真の天才は一切の知性的法則を必要としない。ヘルダーはこのことから合理的理性に反対の立場をとる。原始的、根源的、感覚的、具象的言語表現としての民族文学を提唱するのである。「オシアンおよび古民謡を論ずる往復書簡」において、民族が原始的であればあるほど、つまり、いきいきとして、自由に活動していればいるほど、その民族の歌も当然ますます原始的、つまり、いきいきとして、自由で、抒情的な活動力を持つ。—— 歌の完全性は情熱、あるいは感情の旋律的歩みの中にある。メロディーは歌の魂であり、歌は読むものではなく、聞くものでなければならない。¹⁰⁾ —— のである。

この点において、ヘルダーはレッシングとは明瞭なる一線を画している。グンドルフによると、ヴィンケルマン、あるいはレッシングは、個性的な世界感情から特定の教養世界を、それらの超合理的生命性において、しかも、それらの歴史的連関の外部において把握した。ヘルダーは歴史的多様性の生成を、世界の全体のうちに、及び個々の現象のうちに、歴史的連関そのもののうちに把握したのである。レッシングにとって世界のあらゆる部屋を開く鍵は理性的法則であったのに対して、ヘルダーにとって、それは生ける力であった。レッシングは到るところに、本質的なものを、規範すなわち最も普遍的なるものを、ヘルダーは形姿や気分すなわち最も特殊なものを、レッシングは共通なものを、すなわち正当なものを、ヘルダーは特殊なもの、唯一無二の存在、個別的なものを、つまり、レッシングは空間における存在、理性的な恒常不変な法則性の象徴や舞台を、ヘルダーは時間における生成、絶えざる更新、変形の象徴、活動的な力の標識を求めたのである。¹¹⁾

3

ヘルダーの思想は若きゲーテにと引きつがれ発展を遂げる。「前稿(2)—— 生の理想 ——」においても触れたように、1770年シュトラウスブルクにおけるヘルダーとゲーテとの出会いはドイツ文学にとって画期的出来事であった。新しい時代の理論的指導者として、ヘルダーはゲーテをはじめ若い世代に大きな影響を及ぼすことになった。

10) Martini: Deutsche Literatur Geschichte s 228

11) 若きゲーテ グンドルフ著 小口優訳 p. 127

22才のゲーテは祝祭演説において新しい時代の文学を表明している。

Ich erkannte, ich fühlte aufs lebhafteste meine Existenz um eine Unendlichkeit erweitert, alles war mir neu unbekannt, und das ungewohnte Licht machte mir Augenschmerzen. Nach und nach lernt ich sehen, und, Dank sei meinem erkenntlichen Genius, ich fühle noch immer lebhaft, was ich gewonnen habe.

Ich zweifelte keinen Augenblick, dem regelmäßigen Theater zu entsagen. Es schien mir die Einheit des Orts so kerkermäßig ängstlich, die Einheiten der Handlung und der Zeit lästige Fesseln unsrer Einbildungskraft. Ich sprang in die freie Luft und fühlte erst, daß ich Hände und Füße hatte. Und jetzo, da ich sahe, wieviel Unrecht mir die Herrn der Regeln in ihrem Loch angetan haben, wieviel freie Seelen noch drinne sich krümmen, so wäre mir mein Herz geborsten, wenn ich ihnen nicht Fehde angekündigt hätte und nicht täglich suchte ihre Türne zusammenzuschlagen.¹²⁾

— 私は自らの存在が無限に拡大されるのを強烈に実感したのです。一切が私には新鮮で未知のものでした。そして、この見慣れぬ光は、私に眼の痛みを覚えさせたほどでした。次第に私は見ることを学び、そして、感謝すべき守護神のおかげで、手に入れたものを今なお生き生きと身内に感じています。私は規則ずくめの演劇を断念することに、一瞬たりともためらいを感じませんでした。場所の統一は私には地下牢のように不安に思われました。そして、筋と時間の統一は私たちの想像力を縛るいとおしい鎖のように思えたのです。私は自由な大気の中に飛び出し、そこではじめて自分に手も足もあることを感じたのです。そして自分の穴に閉じこもり規則ばかりを口にする演劇家諸氏が、私に対してどれほど多くの不正を働いたか、どれほど多くの自由な魂がいまなおその中で悶えているかを知った今、私が彼らに果し状をたたきつけ、日々、彼らの塔を打ち倒そうと努めなければ、私の心臓は破裂してしまったことでしょう。—

ゲーテが本能的に予感し、求めていたものが、ヘルダーとの交際の中でより明確な形となった。彼はヘルダーから民族と歴史、始源的、感覚的、具象的言語表現としての民謡を、ホーマーを、そしてシェークスピアにおける自然を知ったのである。ヘルダーはシェークスピアの自然に神の意図を見ていた。— 怒濤さかまく事件の大海原の前に立つつもりで、彼の舞台の前に歩み出よう！自然の様々な場面がもりあがっては、また消え、支離滅裂のように見えながら互いにからみ合い、呼び出し合い、またつぶし合う。それは酩酊と混乱のもくろみのもとに

12) Zum Shakespeares Tag

すべての人々を集めたように見えるが、実は神の真の意図を実現するためなのである。¹³⁾ — ヘルダーは自然の中に、そして生きとし生けるものの中に神を見い出すのである。このヘルダーを通しての、ゲーテのシェークスピア体験は、以後の抒情詩に大きな影響を与えている。彼はこの感動を「シェークスピア記念日によせて」の一文の中で語ったのである。彼にとって、シェークスピアの作品はいずれも、我々人間の自我の独自性、我々の求める自由が世界全体の必然的な歩みと衝突する神秘的な一点を中心に廻っているように思えたのだ。 — それは、これまでいかなる哲学者も、見たことも規定したこともない一点です。 — それにしても我々の世紀が自然について判断を下そうとすることは、何という傲慢な態度でしょうか。我々は若い時から、自然がすべて縛りあげられ、飾りたてられているのを我身に感じ、他の人々にも見ているというのに、どうして自然を知っているなどといえるのでしょうか。¹⁴⁾ — ゲーテにとって自然は一層包括的な、一層直接的な現実となった。また自然は人間の世界のみならず、宇宙全体をも意味するものになったのである。

WILLKOMMEN UND ABSCHIED

歓迎と別離

Es schlug mein Herz, geschwind zu Pferde!

心は^{はや}速る 急ぎ馬へ

Es war getan fast eh gedacht;

と思うより早くぼくは馬を駆った

Der Abend wiegte schon die Erde,

黄昏はすでに大地を眠りに誘い

Und an den Bergen hing die Nacht;

山々には夜の帷^{とばり}がかかり

Schon stand im Nebelkleid die Eiche,

解^{かしわ}はそそり立つ巨人の姿ながら

Ein aufgetürmter Riese, da,

はや霧の衣をまとしてそばだち

Wo Finsternis aus dem Gesträuche

木立ちの茂みからは

Mit hundert schwarzen Augen sah.

闇が幾百の漆黒の眼をこらしていた

(山口四郎訳)

この詩は、1771年の作、シュトラウスブルクから、フリーデリーケの住むゼーゼンハイムに何度となく通った体験を詩にしたものである。以前の技巧的なロココ風の詩とは違い、自らの体験や情熱を素朴な言葉で自由に歌った。ここでは人間と自然の中に潜む崇高なものが一体となって現れている。もはや分裂は見られない。ヘルダーを通して把握した自然は、かつてのように永遠に静止する無時間的な存在の世界ではない。¹⁵⁾ 個々の現象すべてが、生き生きと律

13) Martini: Deutsche Literatur Geschichte s 228

14) Zum Shakespeares Tag

15) 若きゲーテ グンドルフ著 小口優訳 p. 140

動、成熟し、呼吸し、つねに活動するものとして、詩の中で表現されることになった。このことは前代の人々が自然のうちに見いださなかった状態である。古代においてもルネッサンスにおいても、人は自然の個々の現象を生成したものとして、すなわち存在としてとらえていた。ゲーテは到るところに生成、運動、発展を見出す。今や眼に見えぬ自然が明確な形で姿を現わし、その生成、運動そのものが旋律に、音声に、言葉になったのである。

Die Ausübung dieser Dichtergabe konnte zwar durch Veranlassung erregt und bestimmt werden; aber am freudigsten und reichlichsten trat sie unwillkürlich, ja wider Willen hervor¹⁶⁾

なるほど何らかの原因が私の詩才の働きを促したり左右することもあった。しかし、この詩才がもっとも生き生きと豊かに流露するのは、それが思わず知らず、それどころか意志に反して働くときであった。

既存の言葉を使って既存のものを、普遍妥当の現実を模写したりするのは彼の流儀ではない。むしろ、普遍的なものに対する彼の態度は冷淡そのものである。ゲーテはあくまで偶然を、言うなれば瞬間の恩寵を抛りどころとしている。この経験が彼にとって詩的価値を持つものである。「美しく光る自然」は恍惚とした心情にのみ、また「神聖なもの」は、感動した心情にのみ、その真の姿を開示する。¹⁷⁾ — 以前の情熱がすっかり消えないうちに、新たな情熱がわが身に生じるのを感じるのは、たいそう気持ちのいいものである。それは我々が太陽のまだ沈み切らぬうちに、ちょうど反対側に月が上がるのを見て、二つの天体の二重の輝きを楽しむのと同じである。 — とゲーテは述べた。¹⁸⁾ このように、自らの内面のみを頼りとして、情熱の燃えあがる瞬間に無条件に身を委ねる者にとって、その感動を伝える手段は、いかなる思考にも乱されず、またいかなる意識によってもさめることのない即興詩の形式をとることになる。瞬間に永遠を見えるということは、神的なものの源泉として、自己の心しか知らないのである。すなわち、自己の絶対化¹⁹⁾である。このことは、ドイツの自然と社会の状況ともかかわっている。彼自身が述べたように、彼は一切を自らの内部にしか求める以外はなかったのである。荒々しい北方の風土のもとで、自らの心と自然の一致ということは非常に困難なことであった。まし

16) Dichtung und Wahrheit 17. Buch

17) E. Staiger: Goethe Ganymed s 78

18) Dichtung und Wahrheit 13. Buch

19) E. Staiger Goethe 1775

て、それが人間の世界となると、ますますその実現は疑わしいものとなった。すなわち、当時のドイツ市民社会は、自然との対立を基礎になりたっていた。本源性ではなく模倣性、即興ではなく規則、最高の感情の吐露されるときですら、神聖に燃える生命ではなく、理性的冷たさを望んでいたのである。このような状況において、彼には、まだ内的なものと普遍的なものとの結びつきから確固とした全体像が生まれるのだという確信をもてなかったのである。

4

1770年代になると、ゲーテの詩作法にも一つの変化があらわれる。

この時期に書かれた戯曲「ゲッツ」は、自らによると構想も計画もたてずに、ただ想像力と内面の衝動に我身を委ね創作されたものである。しかし、彼は「詩と真実」において、——最初の二、三幕は本来の目的にそったかなりの出来ばえといってよかった。しかし、それに続く幕、ことに終幕で、私は知らず知らずのうちにある不思議な情熱に心を奪われた。アーデルハイトを愛らしい姿に描こうとしているうちに、私自身がすっかり惚れこんでしまったのです。²⁰⁾——と述べている。すなわち、幾多の芸術上の束縛から脱して、詩の新しい領域を開こうとした結果、湧きあがる情熱より生まれた魂惑的な女性によって、彼自身が押しのけられたのである。彼はこの危険性を、既に当時気づいていた。この時期に書かれた彼の詩には、シュトルム・ウント・ドラング期に比べ、明らかな沈静化が見られる。

Mir ist es, denk ich nur an dich,	あなたを思えばわたしの心は
Als in den Mond zu sehn;	さながら月を仰ぎ見る思いにひたされ
Ein stiller Friede kommt auf mich,	なぜか知らぬが静かなやすらぎに
Weiß nicht, wie mir geschehn.	この胸はそっと包まれる

(山口四郎訳)

ここでは光り輝く太陽にかわり、月と夜の世界が描かれている。「五月の歌」における太陽のように、月光是生気と喜びを与えない。白日のもたらす感動は彼からは消えている。静けさと平安を求め、「なぜか知らぬが静かな安らぎ」に包まれるのである。彼はまだ明確な恩寵を手にはしていない。静けさと孤独の中で、決して気負うことなく詩人の像を探るのである。以前のような永遠なる瞬間を熱望する姿はここにはない。

1776年9月、ワイマールにて、彼は詩「航海 (Seetahrt)」を発表している。これは前年に作

20) 前号 18世紀ドイツの文学的状況(2)

られた「湖上にて (Auf dem See)」とは全く違った印象を与えている。「湖上にて」は、小舟の進行にまかせ、眼の前に漂うもの、ゆらめくもの、雰囲気そのもの、心の中に湧きたつものを直接言語化しようとしたものである。²¹⁾しかし、「航海」においては、彼はもはや瞬間瞬間に身を委ねようとはしない。

SEEFAHRT

Lange Tag und Nächte stand mein Schiff
befrachtet;
Günst'ger Winde harrend, saß mit treuen
Freunden,
Mir Geduld und guten Mut erzechend,
Ich im Hafen.

航 海

幾日幾夜を俺の船は荷を積んだまま
でいた
俺は順風を待ち 心を許した友らと
酒を酌み
忍耐と英氣とを養いながら
港にいた

(山口四郎訳)

彼は迫りくる嵐に対し、沈黙し、「忍耐と英氣を養いながら」、瞬間を辛抱強く待っている。この航海はもはやチューリヒ湖における舟遊びではない。

Aber gottgesandte Wechselwinde treiben
Seitwärts ihn der vorgesteckten Fahrt ab,
Und er scheint sich ihnen hinzugeben,
Strebet leise, sie zu überlisten,
Treu dem Zweck auch auf dem schiefen
Wege.

だが神の送り給う風はやがて変わり
彼はかねての航路からはずれた
然し彼はその風に身をまかすかに見せて
ひそかに風を欺くことに勉め
航路こそ逸れながらも目標は忘れなかつた

彼は自己を主張する。屈服のふりをしてでも自分の目標からは眼を離さない。瞬間に心を奪われることはない。

Doch er stehet männlich an dem Steuer;
Mit dem Schiffe spielen Wind und Wellen:
Wind und Wellen nicht mit seinem Herzen.

然し彼は男々しく舵を握っていた
風と波は船をこそもてあそんだ
だが彼の心まではもてあそぶことはできなかった

21) 若きゲーテ グンドルフ著

Herrschend blickt er auf die grimme Tiefe	彼は猛り狂う大海を支配者然として見は るかしながら
Und vertrauet, scheiternd oder landend,	難破するとも然らずとも
Seinen Göttern.	一切を彼の神々にゆだねていた

シュタイガーによると、この詩には、この時代の最初の成果が見られるという。ゲーテの新しい情熱は忍耐である。そして、つぎに彼は自然の心をわれとわが心のうちにとりいれることを諦めている。すなわち、彼は世界と対決し、自らの存在の歴史を始めようとする。そして、最後に自らの願いが達成されるといなどにかかわらず、未知なるより高き力の尊厳に身を委ねようと決意するのである。

このようにして、18世紀の啓蒙主義の思想は、レッシング、ヘルダー、若きゲーテを経て、古典主義へと発展していくのである。

Literatur

Wilhelm Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung. Vandenhoeck Ruprecht
 Emil Staiger: Goethe Atlantis Verlag
 Fritz Martini: Deutsche Literaturgeschichte Alfred Kröner Verlag
 Peter Pütz: Die Leistung der Form, Lessings Dramen, Suhrkamp Verlag
 B. v. Wiese: Deutsche Dramaturgie von Barock bis zur Klassik Max Niemeier Verlag
 Goethes Werke Hamburger Ausgabe in 14 Bänden Verlag C. H. Beck
 Gespräche mit Goethe F. A. BROCKHAUS'—WIESBADEN
 Lessings Werke Insel Verlag
 ドイツ文学 歴史と鑑賞 朝日出版
 ゲーテ E・シュタイガー 人文書院
 ドイツ文学史 原初から現代まで 三修社
 ドイツの文学 新潮社版
 ゲーテ全集 潮出版社